

高校・大学における女子サッカーの発展に関する研究

-競技力と入試難易度の観点からの考察-

トップスポーツマネジメントコース

5008A305-9 石山隆之

研究指導教員： 平田竹男教授

日本女子サッカーは代表のオリンピックに向けた強化が実り、前回アテネオリンピックに続き2008年にも北京オリンピック出場を果たした。そして本大会でベスト4という過去最高の成績を収めるなど近年めざましい発展を遂げている。しかし、ユース年代においてはいくつかの問題を抱えている。

筆者は東京都高体連サッカー部女子委員長、高校女子サッカー部の監督としてユース年代の女子サッカーに関わっている。現在高体連サッカー専門部女子部の加盟校数を増やすよう働きかけをしており、高校年代の競技者数は年々増加傾向にあるが、筆者が担当している選手の中でも、多くの生徒が高校卒業後サッカーから離れてしまうという現状がある。

このような現状を踏まえると、高校生の受け皿である大学女子サッカーが発展することで、大学に入ってから女子サッカーを継続する選手が増えると考えられる。

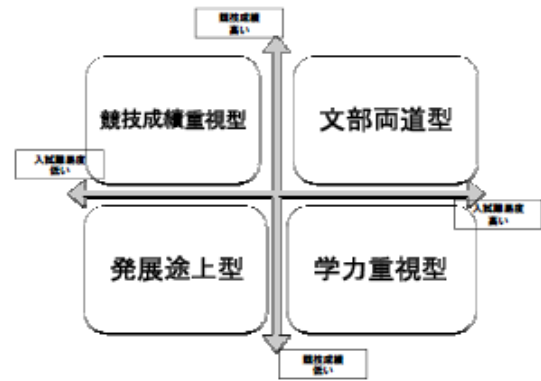
そこで本研究では、大学女子サッカーにおける現状の問題点を明らかにするとともに、我が国における大学女子サッカーのさらなる発展策を探ることを目的とする。

高校生が大学進学を目指す際、将来の進路や自らの興味に合わせて大学を選択する。そして、大学に入学するためには、種別を問わず入学試験などが存在する。そのため、高校生からの進学需要が高い大学は入学試験の難易度もおのずと高くなる。以上の観点から、本研究では女子サッカーの競技力と入試難易度という2つの観点にフォーカスして現在、大学女子サッカーリーグに、どのようなタイプの大学が所属しているのか分析を進めた。

また大学女子サッカーの分析の他に、大学側からみた選手の主な供給源である高校サッカーの現状も明らかにする必要があると考えた。

よって分析対象は、全国及び地域の加盟校数の割合が高いことなどを理由に、2008年度関東大学女子サ

ッカーリーグと2007年度東京都女子サッカーリーグ高校の部をサンプルとした。問題点を抽出するため、それぞれの競技成績をポイント化し偏差値に換算したものと、入試難易度を偏差値で数値化したものをマトリクス図にプロットしたのち、図のように4タイプ分類(※以下の定義参照)し分析した。



※「文部両道型」第1象限

-競技力が高く、入試難易度が高い

※「競技成績重視型」第2象限

-競技力が高く、入試難易度が低い

※「発展途上型」第3象限

-競技力が低く、入試難易度が低い

※「学力重視型」第4象限

-競技力が低く、入試難易度が高い

(本論文では、勉強とクラブ活動との両立の意味からあえて「文部両道」とした。)

その分析結果から考察をしたところ、関東大学女子サッカーリーグ加盟大学では学力軸で見た場合、いわゆる「MARCHG(明治・青山学院・立教・中央・法政・学習院の人気私立大学群)」ゾーンの私立大学に女子サッカー部がないことが明らかになった。そして、「文部両道型」が極端に少ないこと、体育やスポーツ系の学部・

学科を持つ大学はいずれも高い競技力を有することなども明らかになった。

一方、選手の供給源である東京都女子サッカーリーグ高校の部に加盟する高校は、大学リーグ加盟校が偏りのある分布であるのに比べると4タイプに広く均一分散していることが分かる。以上の考察に加えて、高校受験案内のデータ結果から女子高校生にMARCHGゾーン受験希望者が多く存在することを考え合わせると、大学女子サッカーの分布の偏りが、多数の生徒が高校卒業後サッカーから離れていく原因の一つとなっていることが伺われる。

また、高い競技実績を有する女子サッカー選手がMARCHGゾーンを受験希望とする場合に、競技力の低い国立大学を目指すか、女子サッカー部のない私立大学を目指すかのいずれかの選択を迫られることになる。競技力(偏差値)が高い傾向にある大学は多くが体育・スポーツ系学部・学科を持つことを考えると、現在MARCHGゾーンにある国立大学の競技力向上は期待することはできない。高い競技実績を有する女子サッカー選手が十分に才能を開花させることは難しい。そのことを考えると、MARCHGゾーンに私立大学サッカー部を創設することは急務といえるだろう。優秀な人材を少しでも取りこぼすことなく大学サッカーに多く取り込むことは、優秀な才能を持つ選手の発掘の可能性にもつながり、ひいては日本女子サッカーの一層の強化にもなるはずである。

今後の関東大学女子サッカーリーグ加盟大学の分布を予想すると、女子サッカーの認知度の高まりからMARCHGゾーンにも部が新設されと考えられる。そしてMARCHGゾーンに女子サッカー部が創設されることで、「文部両道型」が極端に少ないという問題点解決に繋がるだろうと考える。またスポーツ系の学部などがない国立大学に新たに部が創設された場合は、「文部両道型」に移行することは考えにくく、現存の大学と共に「学力重視型」を構成すると予想される。「発展途上型」に属する多くの大学は「経営資源」として女子サッカー部を活用する事が考えられる。そして今後も新たに創設の流れは続き「発展途上型」に属する大学のうち、選手・環境・指導者の整備を進めた大学は競技実績を出すだろう。

「競技成績重視型」や「文部両道型」への移行を目指す大学は競争相手が多くなると予想される。そして「発展途上型」と「学力重視型」には、サークル系運動部が増え大学女子サッカー普及の下支えになることを期待する。

女子サッカーのさらなる発展を考えた時、高校卒業後も競技を続けられる環境の整備が必要不可欠であろう。そして今後の大学女子サッカーの役割は、大学女子サッカーがトップアスリートを目指すのみにとどまらない、多種多様な人材の受け皿になることと、女子サッカー界を発展させる人材育成の場となることを期待する。